

釜石の歴史

よもやま話

11

釜石の鉄学編(7)

問い合わせ
市世界遺産課

22-8846

釜石製鉄所の歴史(3)

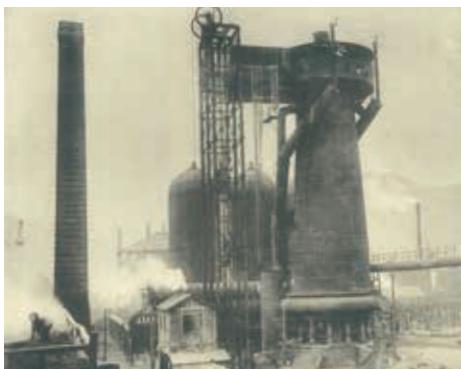
釜石鉱山田中製鐵所の発展

明治36(1903)年、鋳鉄製造工場を竣工し、民間初の銑鋼一貫製鉄所となつた田中製鐵所は、翌明治37(1904)年には日産60トンの第3大高炉を建設します。主な製品は水道管でした。

明治20(1887)年、横浜に近代的な水道が開設されて以来、函館、長崎、大阪、広島、東京と水道管の敷設が進み、コレラをはじめとする伝染病対策もあり、全国に普及していきましたが、当時、国内生産品は質が悪い状況でした。そのような中で事業に参入し、明治期には日本最大の水道管メーカーになりました。現在でも水道管の取替工事に伴い全国各地で「田中」の印がついた水道管が出土しています。鋳造工場には釜石地域の民俗学者としても著名で、柳田國男とも交友があり、後に尾崎神社の宮司となる山本茗治郎(鹿州)も勤務していました。鉄の歴史館では茗治郎作の鉄の花瓶を所蔵しています。



大鉄管铸造場



第3大高炉

生産量の増加に伴い、原料などの運搬も増大し、明治43(1910)年に軽便鉄道法の公布によって、明治44(1911)年に釜石鉱山専用汽車(社線)が開通しました。実際にはこれ以前より製鉄所構内や鉱山では部分的に汽車を運行しており、大正6(1917)年には20両の機関車を所有していました。一方、海運でも専用船を12隻保有し、大正7(1918)年には南棧橋を新設しています。

従業員も増えたことから福利厚生施設として社宅や病院、小学校なども建設されました。

田中長兵衛(2代目)は、台湾の金瓜石鉱山(金山)採掘も始めており、大正6(1917)年、田中個人經營から株式会社となり、製鉄所は田中鉱山釜石鉱業所となりました。



作家・長谷川時雨と釜石

長谷川時雨は明治12(1879)年、東京日本橋で弁護士を開業していました。長谷川深造の娘として生まれ、明治30(1897)年に水橋信蔵と結婚させられます。水橋家は田中製鐵所のコークス銑や鋳鉄管販売を一手に引き受けていたいわゆる「鉄成



長谷川時雨文学碑

釜石小学校の山手にある八幡神社の脇に設置されています。「旧聞日本橋」「渡りきらぬ橋」の一節が刻まれています。

金の家で、信蔵の兄義之助は明治35(1902)年に家督を相続し、水橋殖産会社として発展をさせた人物です。一方、弟の信蔵は遊び人のため釜石鉱山に追われ、3年間釜石に暮らすことになります。その直前に時雨の父深造が鉄管の汚職事件で有罪となります。釜石での暮らしは『新女苑』掲載、後に『旧聞日本橋』に再録された「渡りきらぬ橋」に記されています。そこには、信蔵は家におらず、ほとんど一人でいることが多く、小説を書き流していたことや、横山久太郎夫妻との交友について書かれています。明治34(1901)年、短編『うづみ火』を投稿して『文學世界』第1巻第15号定期増刊「磯ちどり」才媛詞藻冬の巻・小説の特賞に選ばれました。その時は『陸中國釜石鑛山内水橋康子』として応募しています。その後東京に帰り、劇作家、小説家としての道を歩み、昭和16(1941)年に亡くなります。その間、林英美子など多くの女性作家を育てました。